

不滅の愛で台湾を

嗚呼！最愛の父と永別する悲しみは大きい。退院後は、一度だけでも車椅子に乗ってもらって、一緒に野原を散策し、そよ風の中でしばしの憩いを共にしたかったのに。ひん曲がった背骨と傾いた肩を抱き寄せ、敬愛の念をぶちまけたいと祈念していたが。

僕はその果たせぬ夢に破れ、揺れる母の肩を引き寄せ、深い哀愁に溺れてしまいそうだった。

しかし、不思議な事に、やがて僕は父の凜冽な人生の幕引きを大地の炸裂の轟音と共に、海の彼方へと移り流れてゆく巨大な氷山の蒼然たる姿を目で追う悲壮感に浸りながら、ただただ生死と天地森羅万象の流転に対する賛嘆を押さえ切れずに無限の感動に包まれ、又次に上昇する力を予感した。燃え尽きた太陽が宇宙に戻った後にも、放射されたエネルギーは不滅で次の生態を育む。漠然ではありながら、自分たちに父の遺志が引き継がれ、そして其の遺志を達成するための祝福と力量を賜る安らかな信念が湧いてきた。

父の訃報に継ぎ、大勢の方々からお悔みを頂いた。故人を偲ぶ真摯な文脈に、僕が大勢の父の旧友の目で父を再認識でき、父の偉大さを改めて感得するとともに、長くない人生において、大勢の優れた方々と触れ合いと友情を共有できた事だけでも、冥利に尽きると心が和む。皆様のご芳情を感激する幸福な気持ち、何時しか莫大な勇氣となって、父のいない自分達を守る最大の資産になってきた。死ぬまで全身全霊で仕事に励み、人と付き合い、また台湾への関心を一貫していた。その強大な信念と行動力は、本人の死後にも尚知人から偲ばれ、又台湾の社会に息づき、不思議なパワーを生かし

続けている。真剣に生かされた人生の後には、人を不安と絶望の奈落から救い上げ、希望と勇氣に導く不滅のエネルギーが満ちているようだ。

故人の博愛主義を記念すべく、IPABA (Inter-Pacific Bar Association、環太平洋弁護士協会) は M.S. Lin Scholarship Fund (林敏生奨学基金) を創設し、発展途上国と若齡の弁護士に補助金を与え、法曹間の国際交流を一層盛り立てる。私達遺族はその好意に感動し、US 十万ドルを同基金に寄付した。

そして、エネルギーは更に生かされる。

本書が既に触れた通りに、台湾は血涙に満ちた歴史を歩んできた国だ。国民党は戦後中国から台湾に敗走して以来、内政上は言論鎮圧の戒嚴令を敷き、一党支配の独裁政権を継続し、一方退嬰的な対中政策を引きずり、国連から追放されてからも次々と外交上の敗北を喫し、台湾を孤立の一途に追い詰める一方だ。この国民党の愚策を卓越な学識で早くから見抜き、一九六〇年代から果敢に蒋介石に開国の提言をした識者は彭明敏先生だ。当時は年未だ三十半ばで既に台湾大学法学部の国際公法と政治学教授。蒋介石は彭先生をまず籠絡を試みたが遂行できず、終に罪に陥れ処刑すべく逮捕した。七年度の自宅軟禁の後、一九七〇年に危機一髪で彭先生は台湾を脱出し、以来海外で亡命生活を強いられて来た。一九九二年戒嚴令解除後、二十五年ぶりに台湾帰国を実現した。父は台湾大学法学部在学中に彭先生に教わったご縁の上、台湾は是非国際法に基づく厳正な主張を国際社会にアピールすべきとの共通の所信を持ち、彭先生に物心両面の支援を展開した。父は当時台湾大学法学基金会の会長としており、同会の名義で「彭先生を迎える講演会」を帰国早々に開催し、彭先生の栄光なる帰国と其の後の政界進出のスタートを法政界の精鋭の協賛で堂々と切って上げた。

一九九六年三月に行われた台湾初の大統領直接選挙に、彭先生は先ず民主進歩党の党内予選を勝ち抜き、同党を代表して出馬し、台湾の主権独立と内政改革を訴えて選挙活動の全国行脚に駆け回った。父は同じ台湾大学法学部出身の前述の林誠一叔父様らと、莫大な寄付金の他、彭先生の選挙キャンペーンに付いて廻り、南北縦断を三ヶ月ほど続けた。九五年の初め頃の脳出血からようやく直りかけた身でありながら。本人の情熱の所為か、信念の強いところなのか時々見分けがつかないが、その純粹さは赤子同然で愛しい。

しかし、世は長い物に卷かれる向き多く、勝ち組みの担ぎ手は世間に幾らでも居るが、信念を貫き、正義を味方するのは乱世では簡単に受けないようだ。結局国家統一綱領を掲げながらも本音では台湾主権独立路線を厳守し、国民党の改革を目指す所謂中間路線を主張する李登輝大統領が有権者に受け、また李登輝氏の落選目当ての中国のミサイル発射と軍事演習が台湾人の反骨精神を激昂させ、更に李氏の求心力と人気度を押し上げた。五十五%の得票率で李総統が再任に成功した。彭先生は李登輝総統について二十三%の得票率で落選したが、シナの軍事恫喝下でも二三〇万票の支持を得られる事実から所信と主張の明示を望む台湾人民の数も相当あると見られた。其の集団意思を大事に次回の選挙に開花させるためには、普段から国民意識の養成と強化の必要性が彭先生と父らの支持者たちに認められた。台湾の改革と建国運動に余命をかける決意の強い彭先生の後ろに、父が選挙以上の支援を継続した。この経緯で「建国会」が設立された。民主進歩党は九三年以来、政権希求の戦略上、台湾独立関連の主張や政策が次第に色褪せ、乃至は与党かぶれの退嬰的な風潮すら見られはじめた。民主進歩党内では終に国民党の曖昧路線に近づく勢力が主流になりかけ、国民党を制する野党としての機能を喪失しつつあった。最大の野党ですら改革色と国家地位の主張を曖昧にする世の中で、「国民党の

外来政権を終結」を軸に立てた党の候補者の敗北は、台湾主権独立無用論乃至は有害論の跋扈を来し、彭先生を始めとする建国会の支持者の肩身を更に狭めてきた。其の時点、彭先生と建国会への支援は、国民党はおろか、父が支援してきた民進党からも邪魔者扱いを受け、政界全体との亀裂を生ずる或いは深めるかの大胆な試みだった。

信念の花は、いつ咲くのかと、父は歯を食い縛る思いで、焦りをよぎりながら自分にこう問い掛けていたろう。

そしてその弛まない努力が実らぬままに、父は一九九七年六月に、癌によってこの世を立ち去った。僕たちには、父を亡くしても、目標を見失わずに頑張り続けられるかの厳しい試練が待っていた。

幸い、TIPLOでは二〇〇名のスタッフと世界中の顧客の好意と支持があり、何とかその冷厳な衝撃に持ちこたえた。しかし、台湾は内外の問題を一杯抱え、衰退と沈没の兆しが気遣われる。

厳しい試練を凌ぎ、信念は、何時か誇りの花の蕾を育む季節を迎える！

信念と行動がなすエネルギーは、確かに台湾を守り続けているようだ。其の開花を見届けられなかった父の代わりに、幸いにして息子の僕が迎えられる。

二〇〇〇年三月十八日、台湾の第二回大統領直接選挙が行われた。台湾主権独立を党の綱領に尚掲げている民主進歩党の代表として立候補した陳水扁氏と呂秀蓮女史が総統と副総統に選ばれた。一介の貧農家庭出身の陳水扁氏は、自力で台湾大学法学部まで首席で卒業した。在学中には既に司法試験に首位で合格し弁護士になったほどの秀才。海事商事法のビジネス弁護士業を数年携えた後に、一九八〇年に高雄で起きた言論弾圧の政治迫害冤罪事件「美麗島事件」の被告弁護士団に参加し、以来政界に移った。政治界で因縁を付けられ、愛妻がトラックにひかれ死に損なったが下半身麻痺にされた。

民主進歩党の創設要員として敏腕を奮って、かつて台南県議員、台北市議員、又国会議員、それに台北市市長等錚々たる経歴を誇るクリーンで有能な台湾の中世代政治家として早くも次期大統領のホープに囑望されてきた。父も台湾大学法学部の先輩として陳氏の政治家駆け出し時代から物心両面の支援を続けてきた。

かれの当選は、五十年余りの国民党独裁政権の交代を実現するだけではなく、才能と努力があれば誰でも出世できる良質な民主社会の風土を育んでくれる。副総統立候補の呂秀蓮女史は台湾大学大学院で修士号習得後に、ハーバード大学の修士号を取った国際公法専攻の才媛型の女性政治家。彼らの当選は、まさに台湾ドリームの実現。

しかし、正義と邪悪の悪戦苦闘は、そう簡単には軍配が上がらなかった。台湾の主権独立論調を終始一貫する陳水扁の当選は、七十年代の蒋介石の誤った外交政策の破局に付け込んで台湾の主権に手を染めようとする中国の台湾併呑への明白な挑戦と中国当局が捉えている。そのため、中国は文攻武嚇を総動員して、主に陳氏をつぶすための宣伝攻勢を三ヶ月ほど前から掛けてきた。国内では中国におもねる与党が率先して陳水扁氏を叩き捲った。陳氏は中国の覇権者と台湾の既得権勢力のやり玉に上げられた。中国の相変わらずの武力行使の恫喝のさなか、国民党を始め他四組の候補者が必死に中国の恫喝に迎合して講和を唱える退廃し切った風圧の中、中国の攻勢を避けたければいやでも国民党の五十五年間の一党集権がもたらす腐敗と墮落を更に我慢するしかないと観念する洗脳された人民を相手に。この選挙には、進歩と革新をもたらす上昇の力と、腐敗、妥協、保守と退却を象徴する沈没退廃の邪悪の勢力との決戦ともなっている。

邪悪の勢力の大きさに、僕らも後退りしてしまいそうなほどだ。シナ、そしてシナかぶれの国内与

党。陳氏が当選すれば株の急落は必至だの、講和しないと戦争になるんだの、国民党の選挙広告には不承不承に招集される兵士たちの愚痴がテレビで流される。もう一人の候補者は元国民党の高官で党内のしがらみが原因で離党したもので、数十億元の闇資金と横領の容疑を受けながら、また家族らを殆ど米国へ移住させながら、台湾を愛するだの改革するだのとかつて台湾省省長在任中にお金をばら撒いた各地方で喧喧諤諤。

是と非の分別の喪失はこれを言うのだろうか、毎日良心を打ちひしがれる思いをして陳水扁氏の当選を希求していた。が、僕には父のような力はないだろうか、引き込んでしまいそうだった。絶体絶命だ。

母は言う。「父さんがまだ居たら、きっと陳水扁の応援で甲斐甲斐しく駆け回っているんでしよう！」と。

そう言われれば、其の光景もごく自然に僕の脳裏に映ってしまう。とぼとぼとはあるかもしれないが、目を光らせてやれ選挙指揮本部やれ弁護士後援会と楽しげに方々駆け巡る日々が続くだろう。

しかし、父を亡くした僕は、父には及ばないにしても、何とかできないのか。

それに気づいたとき、既に選挙まで四十日しか残らない接戦の時期だった。九八年の台北市市長選では何回も弁護士後援会から通知を受けたが、父が亡くなったばかりの身では人の選挙応援で騒ぐものじゃないと自粛して参加はしなかった。が、幸い去年から台北市弁護士会の理事に当選し、一年間ほどで相当の知り合いが出来た。といっても大方前理事長と呼ばれる父の七光りのおかげだと思ふ。其の人脈関係を、注意深く生かす事にした。陳水扁弁護士後援会に連署する弁護士を一人でも増やせればと思つて、僕は選挙までの最後の一ヶ月間は必至に根回しをした。其の後、広告もふんだんに出

した。弁護士後援会の他、建国会の名義でも、ついでさくさの中、自分の名義が無断に使われて、新聞の第一面にある候補者を批判する広告で出されたため、これでは自分の趣旨と異なるし不十分だと思ひ、翌日又陳氏を推薦する旨の広告を出したり広告合戦を一気にやって退けた。TIPLLOの十四階大会場は、陳氏と呂氏の応援演説の場として提供し、常時支持者で賑わっていた。

もうこれは戦争だと、血がやたらに騒ぐ。戦う以上、血を流す戦争より、頭を使って済む戦争を今の内に思い切り戦わないと、後を引いては堪らない。

選挙の熱気が我がTIPLLOで更にエスカレートした。ついに登場したのは、TIPLLOのビルに取り付けられる、大通りに映し出される五つの⑤の超大型ネオンだ。陳水扁氏は第五番の候補だからだ。それは選挙一週間前からの思い立ち。その外、三日前からは、国民党の買収作戦を制するために、六台もの自家用車に「買収反対、賞金一五〇〇万元」と大文字のステッカーで飾り立て、台北市を回る。

勿論、選挙前日の四十万人も集まる陳水扁の台北後援大集会に、旗と幟を沢山積んでTIPLLOのスタッフ数十人で参加した。台北市サッカー場を埋もれた数十万人の老若男女が沸き上がる歓声と喝采の渦を巻き上げ、待ち焦がれる春の訪れを告げる。陳水扁と呂秀蓮の当選を祝福するように其の台北史上最大の盛会は六時間以上も盛り上がり続けた。父と一緒に見てきた、参加してきた数々の応援集会を思い浮かべながら、この愛と喜びに満ちた平和の革命を実現出来る日の到来を、父も優しく見守ってくれているだろうと掛け声と大合唱の騒ぎの中でふと思ひ描いた。